

藻場分布状況モニタリング調査

(藻場分布状況モニタリング調査)

吉田太輔

1. 調査目的

近年、全国的に藻場が衰退傾向にあり深刻な問題となっている。県内においても漁業者からの相談が増加傾向にあり、藻場の減少が急速に進行していると推察されるが、その実態と原因については不明であり、早急な対策が必要であると考えられる。

そこで、県内の大型海藻を主体とする藻場分布状況について継続的なモニタリング調査を行うことにより、近年の藻場減少の現状把握を行うとともに、その原因について明らかにする。

2. 調査方法

調査初年度であることから県内全域の藻場状況の概要を把握するため、採介藻漁業者を対象とした聞き取り調査を行った。

対象地区は、松江市3地区(七類、沖泊、御津)、出雲市3地区(坂浦、鷺浦、小田)、大田市2地区(久手、仁摩)、浜田市1地区(生湯)、益田市2地区(大浜、飯浦)、隠岐島後4地区(中村、五箇、大久、津戸)、隠岐島前3地区(西ノ島、海士、知夫)の計18地区とした。対象者は、主に経験年数20年以上の漁業者を対象とし、各地区1~3人の計27人に聞き取りを行った。聞き取り内容は、地区における藻場の分布状況や経年変化等についての質問を主体に行った。

3. 調査結果

藻場を形成している大型海藻は、主にアラメ、クロメ、ワカメ、ホンダワラ類(アカモク、ヤツマタモク、ホンダワラなど)であり、地区間で大きな違いは見られなかった。各地区ともにホンダワラ類が優占し、アラメ、クロメが部分的に群生しているという状況であった。

藻場の増減については、隠岐島後北部の中村、五箇で「変化なし」との回答であったが、その他の地区では大型海藻の藻場の減少があるとの回答であった。藻場の減少は、平成元年頃から

確認され始め、近年は減少割合が加速傾向にあり、県内ほぼ全域で広域的または部分的な藻場消失があるとの回答であった。

平成25年8~9月には、西部日本海沿岸で高水温の影響による大規模なアラメ、クロメの枯死が発生した¹⁾が、聞き取り調査からも本県においても石見地域から島根半島西部にかけて同様にアラメ、クロメの大量枯死が発生したことが確認された。

藻場の減少原因については、半数以上の12地区で「海水温の上昇」と回答しており、特に「冬場の水温が暖かくなった」、「冬場の藻場の生長が緩慢になった」等の回答があった。また、藻場の主な食害生物であるアイゴ、ムラサキウニ、ガンガゼの生息量の経年変化については、「増加した」よりも「変化なし」との回答が多かった。これらの食害生物は、全地区で確認されているが、殆どの地区では「食害の影響を与えるだけの生息量ではない」とのことであった。

今回の聞き取り調査から、ほぼ県内全域で藻場が減少していることが確認された。次年度以降、県内各地に設けた調査定点において継続的なモニタリングを行い、藻場の現状把握とその減少原因について調査する予定である。

4. 調査成果

調査で得られた結果は、出雲地区水産シンポジウムで発表した。

5. 文献

1) 公益社団法人全国漁港漁場協会：改訂磯焼け対策ガイドライン(2015)